ツキジデスの史学について

原　隨　園

【要約】歴史は人間のつくるものと考え、国家を一つの歴史的個体としてとりあげた。そして国家理性が非合理であることを記述した。歴史家として存在としての国家を問題にしたが、国家のあるべき規範を示唆することによつて四世紀の哲学へのかけはしとなつた。

一

四二五年、スパルタはピロスにおいてアテナイの攻略軍に降服した。敢闘の精神にきこえたスパルチアタイの降服は、「ギリシア人に最も意外とされた」のであつた（Ⅳ40）。海軍ですぐれたアテナイは四一三年シケリアにおいて惨敗した。「アテナイは涙で応じきれないほどの大きな苦しみをなめた」（Ⅶ75）。

さらに一葦帯水のエウボイアを救援することができなかつたために、アテナイにとつて大切な物資の補給路であるエウボイアの都市がスパルタ方についた。「エウボイアの離反はシケリアにおける（失敗）以上に恐怖を与えた」（Ⅷ96）。四一一年のことであつた。

このようにむかしから海陸両面できこえていた大国がそれぞれきずついた。大国がきずついたばかりでなく、永い期間にわたり、その間に幾多の天変地異があり、多くのポリスが戦争によつて荒廃した（Ⅰ23）。ペロポンネソス戦後はこうしてギリシア世界を大きく変質させた。

しかしこの戦はスパルタもアテナイも、双方が十分に覚悟し、十分に用意してとりかかつた戦争であつた（I 2）。だから戦争を契機としてギリシア世界が大きく移り変ろうとしていた情勢が、戦争をまきおこしたのである。

ツキジデスの歴史は、この興味深い時代に関する根本史料である。

実証的な近代史学はすべて史料の信頼性の検討からはじまる。ツキジデスの歴史についてのいろいろな論争は、いわばこの戦役、この時代の歴史に関する根本史料としての信頼性を中心としたものであるといつてよい。

ツキジデスはいろいろの史料をつかつているし、その史料の使い方も批判的であつたことはよく知られている。また彼自身が将軍として失脚する原因となつた敵将ブラシダスに対しても、冷静な第三者的な態度をもつて記していて（IV 91、108）、非常に公明でもあつた。近代史学の上からも尊敬されるゆえんがある。

しかし今ツキジデスについて改めてのべたいと思うのは、一つは人間の歴史として歴史をかいているという点と、それに関連して歴史的個性についてはつきりした認識をもつたという点とである。

史料の検討からはじまる近代史学は、そのことによつて異常な進歩をみた。それは否定しがたい事実であり、その点に異存はない。しかし客観的という言葉によつて、われわれ自身、歴史の世界から縁のないものとなつてひきはなされていつてはいないだろうか。また歴史家が史料とよび、史料を取扱うさいに、あまりに史料を冷凍化してしまうきらいはないであろうか。解釈法学者が、ときには条文にしばられて、法の精神をみわすれるように、史料は人間が残したものであり、史料には人間の血がかよつていることを考えないのではないか。

ツキジデスの歴史をよめば、彼が非常に実証的な立場に立つて歴史をかいていることも、その八巻の歴史は五世紀のアテナイの歴史、ギリシアの歴史を知る有力な史料であることも確かだ。けれども、それより先きに、彼がどんなにか人間の歴史を書こうとしたかということを十分に注意すべきである。いかに客観的に戦争の歴史を書いたかということよりも、人間の歴史をどんなに書いたかということ

が大切なのである。客観的に材料を取扱うということは、学問の出発点であるから、その点をはつきりさせたことは、ツキジデスについてもちろん高く評価さるべきである。けれどもそれ以上に、歴史を人間のつくるものとしてとりあげ、人間の歴史として歴史を書いたということが、もつと強く評価されねばならない。

歴史は人間によつてつくられるものと考えたツキジデスにおいては、従つて歴史的個性の問題が、当然問題とされたのである。

ツキジデス以前において、民族や国家の行動が歴史の対象としてとりあげられているが、民族や国家の行動と個人の意志とがどんな関係にあるかは区別されていない。それはもちろん民族や国家の構成につながる、いわば時代に結びついた問題である。ツキジデスにおいては、その点、民族や国家が一つの歴史的個性として考えられている。国家はいかにあるべきかが、哲学者たちによつて論議されるようになる時代と前後してツキジデスは歴史を書いた。いわば丁度ポリスの構造が問題となつてきた時代ではあつたが、彼は歴史のなかにそれをもちこんでいる。国家を独立した歴史的個性として歴史のなかにとりあげたことは、歴史家の発展の上から注目すべきである。

二

アリストファネスは「蛙」のなかでこう書いている。ソフォクレスは、「この世においても満足に、あの世においても満足している」(82)。

このように平安な生涯を送つたソフォクレスも、二度将軍となつて戦を経験しているし、アテナイ人としてシケリア遠征の失敗をその目で見た。戦争のきびしさを決して知らなかつたわけではない。アテナイの全盛期に二度も将軍の栄職についたからといつて、アリストファネスのいつたようにソフォクレスは満足して此の世にいたわけではない。

ソフォクレスはアンチゴネをしていわしめている。「自分は悩むために生れたのではない。愛するためである」と(523)。

この言葉には、高度な人間意識がみられる。悲しむべき同胞間の戦争に対して、切々たる人間の愛情をうたつてい

るのである。憎みあう人間の現実に対して、憎しみをこえた愛情への叫び声であつた。

年老いたトロイア王プリアモスの懇請にもかかわらず、アキレウスはプリアモスの愛子ヘクトルの遺骸をひき渡すことをこばんだ。しかし悲嘆にくれる老人の姿を目のあたりにみて、アキレウスはふと故郷に残した父のことを思つた。そして遂に遺骸をプリアモスにひき渡した。涙をもつて手をにぎりあつたのは敵も味方もなくただ人間であつた。イリアスの最後にうたわれたこのアキレウスの心情は、永久に読者の心を捕えずにはおかないであろう。

しかし、思うに、このイリアスにうたわれている美しい人情は、その時の情況が誘致した人間自然のパトスである。ソフォクレスの場合は、そのような自然のパトスをあらわしたものではない。

ツキジデスはいう。人間は不正をうけることに対しては、暴力をうけるよりも憤りを感ずる（I 77）。人間はまことに不正をにくみ、不義を憤るものである。このようなネメシス的な心性をみとめるとすれば、人間の世に憎しみはたえないであろう。不義なるが故にこれを憎み、不正なるが故にこれを憤る。かかるネメシスはロゴス的である。

ソフォクレスが憎みを否定した愛は、ホメロスのうたつた自然に流れ出るパトス的な愛ではない。憎しみのある現実をみとめ、それをこえたロゴス的な愛である。

五世紀のギリシア人の人間意識はかかるところまで高揚していた。このようなロゴス的な愛の認識は、憎しみの現実をよくみきわめることが前提となつている。

昨日まで「限りなく憎んだ者を友とし、友としていた者が敵となる。これは人の世の捉である」（Euripides, Hekuba, Choros, 846）。

ソフォクレスと同時代の詩人エウリピデスはあさましい人間の姿をこのようにみた。表裏つねなき離反の姿は、悲しいけれども人間の世の捉だという。けだしこれらが人間現実の実相であるという。

ソフォクレスとエウリピデス。彼等はそれぞれ人間の在るべき姿と人間の在る姿とをうたつている。エウリピデスも人間の在るべき道を知らなかつたのではない。ソフォクレスも人間のリアルな現実に目をおおうていたのではない。ともに人間の実相をよく心得ているのだが、ただ一方

が人間の在存をとき、他方が人間の規範をといたのである。そして規範をとくにしても、人間存在の現実を確認した上に規範がたてられているのである。

ツキジデスはこれらの劇作家と同時代の人として、人間について深く考えるところがあつた。「平穏な時や順境にあれば、人間はよい気だてをもつものである。だが戦争は、日常品の自由な供給をうばう圧制的な教師である。戦争は人間の気風を一変させるものだ」（Ⅲ82）。ツキジデスはこのようにのべて、戦争において人間が本能的に自分をさらけ出すことを示している。このように醜い人間存在の現実を歴史のなかにとりあげている。

彼は人間に支配できない運命（Ⅳ64）ということをしばしばといている。例えば戦争の結果などが運、不運によるといつている（Ⅴ102）。しかしこれまで信ぜられていたように、人間の運命が神の手にあることを意味しない。それは未来の不可知なことをさしているにすぎない（Ⅳ62）。従つて運命にたよるよりは、むしろ人間の思慮、判断によつて行動すべきだと考える。ペリクレスは「アテナイがペルシアに勝つたのは運によるのではなくて判断による」といつている（Ⅰ144）。またアテナイの使者はメロス人に向つて「運命よりは無分別のために、よりはずかしい恥辱を招くことが多い」といつている（Ⅴ11）。

人間意識の高まつた時代に出たツキジデスが人間のつくるものとして歴史を書いたことは、或は当然だといわれよう。しかし歴史を人間のつくるところの歴史として書いたツキジデスは、史学史の上で一つの時代を劃するものといつてよい。

人間の自覚はこのように五世紀には各方面にあらわれてきているが、さらに人間をツォオン・ポリチコンとしてみる意識が高まつてきている。そしてポリス的人間として人間をとらえるについても、存在と規範と二つの方向からなされている。ツキジデスはこのような人間存在の面を意識して書き、四世紀に入つてプラトンやアリストテレスがこのような人間の規範を書いたといつてよい。

かつて僭主たちに奉仕したポリスでなく、ポリスとして行動することのうちに、それをになう市民の存在が意識されてきた。ツキジデスにおける人間一般は、ポリス的人間としてとらえられてきたのである。ポリス的人間としての

自覚が高まつてきたこととあいまつて、人間完成の場と考えられていたポリスも独立の意志をもつて行動するように観察されてきたのである。

ポリスが独立した一個の意志をもつて動くものとみたツキジデスは、端的にいえば、国家権力の在り方を忠実にえがいたものということができる。こういう態度はギリシア史学においてでなく、一般の歴史学においても最初のことであつた。ペロポンネソス戦役という、古代ギリシア世界の一大転換期であつたので、国家個性が一段と強く意識されねばならなかつたからでもあるが、ツキジデスは、ポリスも人間と同じように、危急のさいには理性を失つて情熱的に動き出すことを説いている。

ツキジデスによると、アテナイもスパルタも、お互に十分に準備をして戦争に突入した（I 18～19）。現代の世界大戦と同じように、戦争になるべき情勢があつたことはお互に知りあつていた。かつ何がそんな情勢の根源にあるかということも知つていた。それにもかかわらず、戦争をさける方向をとらないで、お互に戦争の準備を懸命にしたのである。それは一体何故だろうか。

ロゴスの自覚をもつた人間でさえも、利害に迷い、愛憎のパトスをおさえにくい。ポリスはロゴスをもつているだろうか。人間個々と人間の集団たるポリスと、一体どんなちがいがあるのか。

現在では戦争の責任が問われ、また戦争裁判も行われた。それは見方によれば、勝者が敗者にだけ戦争の責任をおわせようとする一方的な考えだともいえよう。また勝者が自らの良心を欺くための偽瞞ともみられよう。人が人を裁くなどということは神の前に不遜な行為とも思われる。だがただ一つ注目すべきことがある。それは戦争の責任ということがいい出されたことである。それは、戦争の原因が何であつたにせよ、戦争を決意し、戦争を行つたものが人間であるという反省が起つたことである。

ツキジデスの歴史をよむと、それは時代も場所もへだたつてはいるけれども、戦争の動因を人間の意志のうちに、さらに意志をもつたポリスのうちに求め、今も問題になる共通点にふれていることがわかるのである。ツキジデスのすぐれた識見を改めてみなおさなければならない。

三

ペルシア戦役はギリシア人の考えを二つの方向に大きく躍進させたといえる。ツォオン・ポリチコンとしての人間に、人間たる徳を考えさせたことと、ポリスの政治権力の性格を反省させたこととの二つである。

元来ギリシアのポリス的人間は、ポリスを人間完成の場所だと考えた。ポリスをはなれては人間存在の意味はないということである。こういう考え方は、血族的な集団意識の延長ともみられるのであつて、ポリスと個人とは矛盾なき一体であるとされていた。それがペルシア戦役によつて変つてきた。

倫理の観念は歴史の進化にともなつて次第に明確になる。ペルシア戦役を境として、人間とは何かということから始まつて人間の徳不徳の問題が論議されてきた。ソフィステスからソクラテスなどが中心問題としたのは徳についてであつた。

これに対して、個人個人の徳不徳の問題とは別に社会集団の問題がとりあげられてきた。ペルシアと戦つたギリシア人の諸国の、戦争に対する貢献の程度のちがい、実勢力のちがいが、同一線列にならべられることによつてはつきりしてきた。そこでポリスにはポリスとしての独自の生活があることを知り、この点でポリスは個々の人間とは、一おう区別される存在となつた。

ポリスを支配するものは法であり、ポリスの行動を指令するものは政治であつた。「法はギリシア人の王である。彼等が法を恐れることはペルシア人がペルシア王を恐れるが如くである」(Herodotos Ⅶ 104) といわれるようになつた。そして法によつて実際ポリスを運営する政治が、市民一般の日常問題から専門化し特殊技能として考えられてきた。プロタゴラスが教えるといつたのは政治の技術であり、この技術は、「国のことについて、最もよく行い、最もよく論ずる」ことであるとされた (Platon, Protagoras 319 a)。これはポリスにはポリスの生き方があり、個人の生き方と別のものだということが、はつきりしてきたことである。

このように人間の生活面には、個人としての生活とは別にポリス独自の生活面があることが知られてきた。そして個人の徳の問題、ポリスの政治技術の問題、政治のよりど

ころとなる法の問題はいずれも哲学者の関係する領域となつた。

これに対して社会集団の行動については、早く歴史意識の萌芽として、「ロゴスの作家」たちの作品にみられる。英雄の物語も実は英雄という特定の個人に収約された社会集団の行動であつた。このように社会集団の行動は早くから歴史家の領域にあつたのであつて、ペルシア戦役ののちポリスが独自の存在として考えられるようになつてからも、ポリスの行動は歴史家の手にゆだねられたのである。

哲学者がポリスの在るべき規範を問題としたとするならば、歴史家はポリスの在る現実を問題としたのである。

ペルシア戦役のころまでは、ポリスの繁栄と個人のそれとは一義的にとらえられていて両者を区別しなかつた。ところが戦役ののちアテナイでは他のポリスを制圧することによつて市民個人の利益を見出すようになつてから、人々はポリスを障壁として自己の利益をはかつた。しかもポリス自身を健全に強化することをしないでも、惰性的に強国の地位が保たれていた。そのために重点が私利におかれ、市民の真の利害はポリスの盛衰のうちにあることが忘れられたかの観があつた。

ペロポンネソス戦役の初期においてアテナイ人は「戦争に関係のなさそうに思われることでも、自分の野心や利益にかられてやつた。結局は自分のためにもならないし、同盟のためにもよくない政策を行つた。従つて万一成功すれば個人にとつては名誉ともなろうし、利害となつたかもしれないが、もし失敗すればポリスのためにならず、戦争の害になる」（Ⅱ65）、そんなことを平気でやるようになつたといわれている。

私利が公益に優先するようになつたばかりではない。法に従順であつた人々のなかにも、「法は人間の暴悪であり、自然にさからつて強制する」と考えるものも出てきた（Platon, Protagoras 337 b）。これは法が弾力性を失つて、個人とポリスとが別々に考えられるようになつた時代にふさわしくなくなつたからである。それのみならず、不正を行う者が「法の支配者となつて正義を左右するように」さえ、なつてきた（Ⅲ84）。民主主義の運営がデマゴーグの支配にかわつた姿であり、また政治が技術化した結果でもあつた。

公私生活が不可分であつた昔とちがつて、人間が公私両面にわかれて考えられ、しかも重心は私生活、私利に傾くようになつた時代にペロポンネソス戦役が起つた。そしてアテナイでは、戦争の失敗は、政治的洞察に誤りがあり、指導者個人の不敏のためだということがわかつた。のみならず、いわゆる指導者も戦争の失敗から権威を失い、無定見な民衆の気まぐれが力をえるようになつた。そこでポリスの繁栄のためには、先ず個人の徳の問題が優先して私利をすてて公益をはかるようにしなければならず、また有識有徳なる人が政治を支配して、小手先きの政治技術をすてしまうべきだと考えられてきた。これが四世紀における人間反省、国家本質の究明へと向つた。こうしてポリスのあるべき規範が哲学者の手で論ぜられるようになつたのである。

このような時にツキジデスはポリスの行動を記述したのであつて、これは時代の進展にそつたまでであるといつてよい。彼の特徴的なことは、そのポリスの行動を記述するにあたつて、ポリスが個人と同様に、独自の意志と感情とをもつて行動する、歴史的個性としてつかんだことである。しからば彼はどのようにポリスを歴史的個性として取扱つたか。

四

ツキジデスはその古代史の部分を終つて、戦役の記述にうつるところでこういつている。「戦争のほんとうの真相というのは、言葉の上では少しもあらわれていないが、アテナイ人が強大となつて、ラケダイモン人の恐怖を起させたこと、これが戦争にいたらしめたのである」と（I 23）。

これは戦争の原因を簡潔にいいあらわしたもので、いろいろな点から注目すべき発言である。ここでは第一にツキジデスが歴史を記述する態度、第二にこれを心理的にとらえようとしていることに注意したい。

第一の点についてみると、言葉の表面からだけとりあげる解釈は、決して歴史の事実を示すものではないというのである。

のちにニキアスの平和が成立した当時の形勢を記述するときにも、平和という言葉にとらわれないで、「事実によつて」それが平和な時代であつたか否かを「識別して観察

せよ」（Ⅴ26）と戒めている。そして表面は平和だといつても、内実には戦争が行われていたことを指摘する。

或はまた開戦するにしても、戦の名分をつくろうためにいろいろの駆け引きが行われ、外交的に接渉する。例えば、平和を破つて開戦するにしても、相手方が先きに条約に違反したのであつて、自分の方から破るのではないという口実をつかむとか（Ⅶ18）、或は自分の野心をおしかくしておいて、第三者を解放して自由にしてやるためだ（Ⅳ86）などと主張する。

このような場合に言葉の表面からだけ判断しても真相は決してつかめるものではない。口実はむしろ真意を偽装する演技にすぎぬことは古今ともに同様である。ツキジデスは、言葉の表面にとらわれないので、背後の真相をついてそれを記述しようとした。真相の追求はあらゆる科学に通ずる精神であつて、歴史学もツキジデスにおいて真実の追求が頗る厳密になつてきたことを示すのである。そして人間の性格から表面を美しくみせかけるものだと見て、背後の真相にふれようとしたのである。

第二に戦争の原因は、アテナイの興隆する情勢に対するスパルタの恐怖にあつたと断じている。これはスパルタ人の心理として原因をとらえた点と、同時にポリス自体が一個の歴史的個性としてとらえられたためであつて、この二点から注目されてよい。

さきにものべたように、ツキジデスは歴史を人間の歴史としてはつきりつかんでいた。「人間性によれば」とか（Ⅰ22）、「人間の本性」（Ⅰ76）などという表現をつかつているばかりでなく、人間の心理や傾向に関する記述は非常に多い。なかにも、恐怖、憎悪、嫉妬、怨恨、偽善などはしきりに出てくる。

個人の心理や傾向をとくばかりでなく、人間の集団としてのポリスも、個人同様な心理にもとずいて行動するものと考えていた。

例えば個人のエゴイズムが説かれる。ニキアスは自分が功名をたててその名声の傷つかぬうちに和平を結び、一そうの名をあげ、後世の名誉を手に収めようとする（Ⅴ16）。政治家として、また将軍としての立場から平和問題が考えられたのではなく、全く一身の利害から判断が行われた。ツキジデスはこのようにニキアスの心理を伝えている。

個人と同じように国家も利己的な判断をもつて行動する。アテナイはコリントスの味方となるか或はコルキラの味方をするかという立場にたつたときに、コルキラを助ける決心をした。それはコリントスはスパルタの同盟者でもありまた海軍も強い。スパルタとの戦争がさけられないものならば、せめてコルキラの海軍力だけでも味方にする方が得策であり、コリントスやその他の海上勢力がコルキラと戦うことによつて、少しでも弱められるならば、それだけでもアテナイにとつて有利である。その上コルキラはギリシアからイタリア、シケリアに渡航する場合に便利な地点にある。このような計算の上にたつてアテナイはコルキラの味方をしたのである（I 44）。

このようにツキジデスは人間心理を分析し、個人と類比してポリスの心理を考えている。それはただポリスを個人と比較しているのではない。ポリス自体が一つの主体性をもつていると考えたのであり、独立した歴史的個性としてポリスを明確につかんでいたからである。

もちろん人間の欠点や悪徳ばかりをあげているのでもなく、また個人についてふれないのでもない。ニキアスは徳に身を捧げて生涯を送つたとか（VII 86）、アンチフォンは徳望において何人にも劣らない人物であり、思慮深い人であつたと記している（VIII 68）。けれども個人の徳不徳はポリスの運命と何のかかわりももたなかつた。個人とポリスとは全く別個の存在として取扱われている。もし個人がポリスにかかわりをもつとすれば、その倫理的な徳行ではなく、むしろ個人の知慧、その政治的な力量によるものであつた。

スパルタの名将ブラシダスの徳や才智をとくのも、彼の力によつてアテナイの同盟軍がスパルタに好意をよせるようになつたことに重点がおかれている（IV 81）。或はペリクレスについても、その私行に関してふれないで、最も有力な反スパルタ的人物として（I 127）、また国家全体の上から最も重要な人物として称揚しているのである（II 65）。

このような態度はツキジデスが人間の歴史をかくにあたつて、ポリスを一個の歴史的個性と考えたからである。ポリスはポリスとして独自の行動をとるが、その行動を人間と類比して観察しているのも、全くポリスを一つの擬制人格としているからからである。

五

人格をもつポリスは個人と同様に知慧をもつて行動する。そしてその知慧とは利害の打算であり、利益の追求をいかに合理化するかにかかつていた。

ニキアスのいつているように「成功は先見の明による場合が一番多く、慾望によつて成功する場合はきわめてすくない」(Ⅵ13)と考えられた。

またコリントスはアテナイを説得して、一番誤りをおかさない時に、最も私益が多いといい(Ⅰ42)、アテナイはスパルタでその覇権をえるにいたつた当時を回顧して、意図が賢明であつたからだといつている(Ⅰ75)。

またコルキラがアテナイに援助を求めたときの使者の言葉は面白い。援助を求めるには援助を与えることが利益だということを相手にまずとかねばならぬ。それでなければ、少くとも実はないといいきかせ、そしていつまでも感謝されるということをのべなければならぬといつている(Ⅰ32)。第一に説かるべきは利害関係であつて、道義的なことは最後におかれている。ポリスの進退がこのような角度から行われたという実相を示している。

このように利害の打算をすることがポリスの賢明な態度だとするならば、「そのときの事情によつて敵ともなり友ともなる」(Ⅵ85)という機会主義にならざるをえない。決して在るべき規範によつて行動するなどということは考えられないのである。

もちろん個人においても道義が無視されないようにポリスにおいても道義が考えられていないのではない。例えばスパルタに対するプラタイアイの態度や(Ⅱ71～74)、或はアテナイに対するメロスの態度などにみられるように、正義の主張が討論されている。しかしツキジデスが、自己の意見として、国家はかくあるべきだとか、正義によるべきだといつているのではない。彼の歴史のなかに数多くあげられている討論のうちに正義がのべられるだけである。だから国家間に正義のあるべきことは知られていたにちがいはないが、利害関係がからみあうと正義は顧みられなかつたことを示している。

もともと利益を追求することが常に倫理的であるはずはない。むしろ倫理をとくのは利益を内部にひそめている仮

面であるが、たかだか便宜主義にすぎまい。大胆になれば、利益を求めるさいに、力が正義だと主張するであろう。

「信頼とか自由とかいつているが、それは一体何であるか。お互の内心の判断とはちがつている」（Ⅲ12）というのが実情であつた。正しい判断や気持では袂を別つべきだとわかつていながら、表面だけは信頼しあつているように美しくつきあつているのだとすれば、それは戦争になつた場合のことを内心に恐れるからであるという。地上には自由か隷属かその二つしかない。こういう世界において対等な同盟はありえない。ミチレネ人のこの告白は、ポリス間の友情が道義的な判断にもとずくものでなくて、お互に表面をつくろつた偽善にすぎないこともあらわしている。内にひそむものは専ら利害への打算であつた。

当時のギリシア世界では力が正義であつた。「すべて強者が支配するのは自然の必然性によることであつて、人間のよく知るところである」（Ⅴ105）。「人間の世においては正義ということは平等な力で強制するときに起るのであつて、（力が平等でなければ）強者が実行し弱者がそれをうけいれるまでだ」（Ⅴ89）と極言されたのである。

力の正義が行われる世において、ポリスで求められたものは利益であつた。ニキアスは「立派な統治とは祖国にできるだけ福利をもたらすことである」といつている（Ⅵ14）。利益になることは不合理ではない（Ⅲ85）のであつて、従つて力によつて利益をはかることは合理的なのである。

このように国家理性は第一にまず国家の利益を考える。そしてその利益を達成させるものは国家の力であるというのである。

シケリアのカマリナの町は、アテナイとシラクサイとの間にあつて中立を保とうとした。けれども不偏不党な態度をとつていれば国家は安泰だなどと考えるのは当時においては許されぬ判断であつた。「中立は公平だとは考えられない」と威喝されている（Ⅵ80）。公平であろうとしても力がなければその主張は貫きえないのであつて、不当だと思つても力の前には屈しなければならなかつた。

強者の権利の思想はヘシオドスの詩にもみえるほど古いのであるが、プラトンの理想国家論にみえるトラシマコスのように、五世紀後半に盛に流布したのである。戦争という危機を前にして、中立することさえも力がなければ不可

能であつた。こうしたときには理性の指示も効力はない。ただ本能的に利益をはかるのほかはなかつた。「他人を支配するのはすべて本能による」（I 76）という討論をツキジデスは伝えている。強者も弱者も本能的に強者の権利を認めたのである。

判断力や知恵を重んじたギリシア人も、当時はこのように公平な判断や道義的な態度を便宜的手段におきかえて利益をはかつた。「余り賢い相手はだますよりほかに実行の方法はない」とされた（III 43）。また理性も強者の力の前には何の役にもたたなかつた。利益、便宜主義、力。ポリスはこのように判断して進退した。

個人の倫理における道義の後退とともに、ポリスにおいてもこのように利己的であり便宜的であり、強者の権利を正義だとした。しかもそれが合理的だとされたのである。

ツキジデスは歴史的個性としてのポリスはかくあつたと記述している。そして国家権力、国家存在の非合理性をこのようにときあかしていることは注目すべき点である。

六

ポリス的人間といわれるギリシア人も、ポリスと個人とが分離しはじめた。ペロポンネソス戦役のころには、ポリス自体の利害や安危が優先して考えられたのではなく、ニキアスの場合のように、まず自己の立場、自己の利害判断から出発している。従つてポリスの内部にはいつも個人的な利害の対立がきびしく、戦争か平和か、或は戦争の場合にいずれの味方をするかという論争がたえずくりかえされた。また戦争ともなれば、常にこの内訌が激化し、味方を裏切つて攻撃者に内応した。これは戦の記述にはほとんどもれなくといつてよいほどあらわれた現象である。これがペロポンネソス戦役の常態であつた。

これは利害の打算が何事にも優先したからであるが、内応や裏切りによつても自己自身や党派の利益をはかつたので、従つて祖国という観念がなくなつてきているのである。

「私はかつて愛国者として考えられていた。……自分が安全に市民権をもつていたときには愛国心があつた。……真の愛国者は正当な理由なしに祖国を失つてもこれを改めない人ではない。手段をえらばず、愛着の念をもつてこれ

を回復する人である」（Ⅵ92）。

アルキビアデスのこの有名な言葉は、もちろんアルキビアデスという特異な性格から出たものとしてうけとるべきであろう。しかし実際はアルキビアデス一人の問題ではなかつた。同胞から追われた以上これをたおすために手段をえらばないという心境は、当時のギリシア人に共通していた。例えばコルキラ人の場合にもみられるが（Ⅲ70～85）、ほとんど枚挙にいとまなきほどである。自己の立場、自己の利益を考えるに急であつて、いわゆる祖国の政権をとろうと企てる。それは決して祖国のためにするのではなく、利益をともなう政権のためであつた。人々には祖国はなく、ポリスは私人に対立する、もしくは私利の対象となる、政治的集団にすぎなかつた。ほんとうの祖国という言葉を口にするのは、かつてペルシア戦役のときに独立を守つたという思い出を語るときに、やつと人々は祖国ギリシアを思い浮べるにすぎなかつた（Ⅴ.Ⅲ57）。それは祖国の幻影であり過去の祖国であつた。現実の人々には祖国はなく、ただ自己中心に考え、自己中心に行動した。

内訌が民族を亡ぼしたということを、ツキジデスはその古代史においてものべているが（Ⅰ2）、この戦役史のうちにも「内訌によつてギリシアにあらゆる悪弊が起つた」（Ⅲ83）と非常に強い言葉をはいている。それほど筆者の目にあまるものであつた。

ペリクレスの逝去をいたみつつ、のちに起つたシケリア遠征の失敗をあわせて論じたなかにも、アテナイは遠征軍に適当な援助をしないで、有力な政治家が政権を争つた、これが遠征失敗の原因だとしるしている。また政治についての論争がアテナイではじめて起つたとのべている（Ⅱ65）。彼はアテナイの悲しむべき運命の禍根が内訌にあることを卒直につき、私の争によつて国が自滅したと慨嘆しているのである。

かかる現象はアテナイばかりではなかつた。シケリアにおいても、「全体が他国野望の的になつているにもかかわらず、ポリスごとに割拠し軋轢しているのがシケリアである。国を亡ぼす最大のものは内訌だ」（Ⅳ61）とヘルモクラテスは絶叫している。

このような内訌を、持てるものと持たざるものとの争いとして（Ⅰ2）、また地主たちと大衆との争いとして（Ⅷ21）

ツキジデスはといてはいる。しかし形式上は民主政治か寡頭政治かという争いとして述べている。そしてさらにその根柢に、人間の心理すなわち恐れとか憎み、或は名誉心、或は利益の追求といつた動機を考えている(I 75 など)。

形式的な政体論からみると、ペリクレス時代のアテナイについて、「名目上では民主政治であるが、実は第一人者の支配だ」といつている(II 65)。だから民主政治か寡頭政治かという争いも、実際問題として政治は寡頭的に傾いているのであつて、やかましく争うほどの問題とはいえない。これはひとりアテナイの民主政治の場合に限らない。彼等には政体についての思想的、哲学的な地盤があつたわけではなく、ただ自分たちの利益をはかる口実に利用していたにすぎない。民主政治だ寡頭政治だといつているのも、従来からの歴史をうけついだ対立の旗じるしであつて、あえて政体に固執していたのではない。目前の処置が有利に行われればよかつたのである。自分たちの不利、不満を政体に結びつけて表面をかざつていたのである。しいていえば、地主たちや貿易業者たちが、それぞれ少数者たる自分たちの手に政権をにぎるか、或は多数者たる大衆がそれをつかむかの区別であつた。だからツキジデスは、これらの内訌を政体論、政治理論の問題とはせずに、利害の打算から出る人間心理の問題とした。それはたしかに妥当な歴史解釈であつたといつてよい。

国内の紛争を勝利に導くためには、外国の助勢を求めるのが常であり、しかもその外国自体も内部では同じ抗争をしていたのである。そのために、内訌は一つのポリス内部の争いでありながら、国際的なつながりをもつた。またアテナイの味方をするかスパルタの同盟となるかは、そのときどきの風向き次第であつて、有力なものに従い、圧迫されればそれになびいた。

これがポリスの政治的実情であつたから、国内の争いは、外国のいずれにつくかについて大きく浮動する。政体はいかにあるのがよいかは、それ自体の問題ではなかつた。さきにのべたような内通が行われるのも、外からの力によつて内訌を処理し、ポリスの内部で利益をはかろうとするからであつた。「いずれのがわも、反対派を傷つけると同時に自分の利益がはかられるように、双方ともに同盟者をもつていた。革命を起そうとすれば、たやすく応援を迎える

ことができた」（Ⅲ82）と記されている。

このような動きをポリス単位にながめるならば、歴史的個性としてのポリスは、個人と同じような心理によつて動くと考えられる。だから最初に引用したように、戦争の真の原因はスパルタの恐怖にあると断定されるゆえんがある。

人々は道義の何たるかをかえりみないのではない。ポリスもまた正義を知らないのではない。しばしば記されている討論の間に、国家のあるべき規範がとかれている（Ⅰ37 Ⅲ67など）。それにもかかわらず、国際情勢は活動してやまなかつた。それはポリス自体が心理的に動揺するからである。利害や勢力関係を計量して行動しようとするからである。理性にもとずいて正義的に行動しようとしないからである。

四二二年にニキアスの平和条約が結ばれて平和になつたといいながら、平和の実は少しもあがつていない（Ⅴ26）。平和を口にしながらお互に相手方の真意を疑つていた（Ⅴ35）。これがポリスの現実であつた。

また国自体の立場から平和を喜ばない国もあり、或は平和になることによつて、反つて強国に余力ができるために別の侵略が新たに行われはしないかと恐れなければならぬ国もあつた（Ⅴ22 32など）。表面は平和であつても、内実の不安は少しものぞかれていない。

さきに引用したように、正義は平等な力によつて支えられるのが実相であるとならば、それは力の正義であつて、危い均衡の理論の上に定つている。いつその均衡が破れるかも知れない。

ポリスが正義をとき、自由を尊重するという在るべき規範は美しい。けれどもポリスの在る現実はこのように不安定であつた。ツキジデスはポリスはこのような心理をもつて動きつつあるものと考えたのである。

七

ツキジデスの作品は、文献批判をまつまでもなく、その第八巻は異色がある。それはアテナイが滅亡に瀕する事態の記述であるためばかりではない。修正追加した部分と考えられるⅡ65などの筆致と併せ考えるときに、ツキジデスの意図がはつきりと推察されるからである。

ポリスも合理的であり、道義的であるべしと考えないわけではないが、現実には非常に非合理に動いている。利益を求め、力をたのみ、便宜的に事を処理しようとする。力の発動は甚だ本能的動物的であつて、たとえ道学者からどんなに非難されようとも、ポリスの実体はこうだとツキジデスはみとめる。またどんなに醜悪であろうとも、戦争とポリスの実相はこうだと主張するのである。歴史的個性としてのポリス、国家理性の非合理性を忠実に描写している点において、ツキジデスのすぐれた特徴がみとめられる。

ところが第八巻や後に修正加筆したところでは、ツキジデスもポリスの在る姿だけでなく、ポリスの在るべき規範について考えはじめたようにみえる。

海軍の勢力をほこるアテナイが、退却しなければならぬということは確かに恥辱である。しかし、究極において敗北することが、一時の恥辱よりももつと恥ずべきことだと考えている(Ⅷ29)。またアテナイ人は、ポリスを亡ぼしてはならないと、町全体のことを思いはじめた(Ⅷ93)。これは今までのような私利私慾の立場をすてたことであり、個人ではなく、ポリス全体のことに関心がむけられたという記述である。アテナイ市民は、党派的な内訌を警戒しなければならぬと自覚した(Ⅷ48)ともいつている。

これは単にアテナイの現実を忠実に記述すれば足れりとする心境をこえている。アテナイが亡国の危機からたちなおるために、私利私慾をはなれ、局部的な浅い判断をすてて、大局的な見とおしを必要とするということは、ひとりアテナイだけの問題ではなく、実はすべてのポリスに通じた問題であるはずである。

また四百人の寡頭政治についても、多くの賢明な人たちによつて行われたから、自然、成功せざるをえなかつたといい(Ⅷ68)、或は寡頭政治が崩壊したあとの私心なき政治は、ツキジデス自身の経験した、最も立派な政治であつた(Ⅷ97)とも書いている。

ここでは私心のない政治と、賢明な指導者による政治が、いかに望ましい政治であるかを礼讃しているようにみえる。

民主政治か寡頭政治か、そういう政治の形式の問題は、ペロポンネソス戦役のあらゆるポリスの内部に行われている争いの、論議の口実になつているが、それはいずれも私

利を内にふくんでいる。こんな形式の変改によつてポリスは決してよくはならない。まず私心をはなれることが先決問題であり、政治をよくするには、私心を去つた賢明な識者によつて運営されなければ、革新の道のないことを暗示しているようにみえる。

ツキジデスはポリスの本能的な醜い現実について、それを忠実に記述するだけではなく、最後にはポリス救済の道をさしているようにみえる。だからアテナイの悲運のよつて来るところを考え（Ⅱ65）、或はペルシアがスパルタとアテナイとの二つの勢力のいずれをも強くせずして優劣なからしめ（Ⅷ87）、そしてこの二つの勢力をかみあわせることによつて利益をうけているペルシアの伝統政策を注意しているが（Ⅷ46、Ⅰ109）、これらはギリシア民族の不幸を痛切に感じていたからである。そこでこの民族の不幸を回復する方策を考えようとしたものと思われる。

また力の正義が行われていることは記述しているけれども、それを肯定するのではない。ポリスの利己的な活動、動物的な発展が、亡国への道を早めるとみている。海軍力を充実するとともに、アテナイが侵略によつて新らしい領域を獲得しようとさえしなければ、必ず究極の勝利がえられるといている（Ⅱ65）。ここでは国家権力が本能的に他に侵略併合しようとする現実に批判を加えているものと思われる。実力をもつた強い国家でも、強者の権利を行使するのでなく、ポリスとしての守るべき限度、在るべき道をふむことが幸福にいたるものだと説得しているようにみえる。

ツキジデスがペロポンネソス戦役を対象として描写したところは、ポリスが人間個人とは別個の個体として、独立してそれ自体の運命を開拓していることである。そしてその実相は甚だしく非合理なものをもつていることを明らかにした。ここに歴史家としてのすぐれた判断がある。歴史家としてはかかる描写にとどまつたとしても彼の評価を低めるものではない。しかしツキジデスはポリスにも在るべき規範の存することを示唆しようとしている。

個人は一おうポリスとは別の個体ではあるけれども、しかもこれら個人の集結の上にポリスのあることを反省させ、個人はポリスを荷うべきものであることを知つていた。だから個人は私の立場だけを考えてポリスを犠牲にすべきで

はなく、むしろ私的立場をすて、内訌を起さず、ポリス全体のことを考えて、正しく運営しなければならぬと考えた。それがアテナイの復興を説き、また賢明な識者によるよき政治の姿を讃美したゆえんである。

このようにみてくると、四世紀の哲学者たちのとりあげた個人と国家との関係、正義や国家のあり方、ないしは哲人の政治などについての問題は、ツキジデスの八巻などの記述のうちにすでに提示されたものといつてよい。ツキジデスは古代においていち早く国家権力の非合理な現実の姿をえがきながら、さらに国家理性のあるべき方向をも示したのである。

新らしい制度や革新によつてすべては常に生命を新たにしてゆく。そして技術と同様に後からのものが制覇する(I 71)。ツキジデスのこういう歴史の理解は、生れた子が産んだ親をたおすことによつて次の時代の支配者となるというギリシア神話以来の伝統的な考え方である。現代は未来によつて打倒されることが必至であるならば、生きることを肯定するために非合理性を露呈する国家権力を、いたずらになげく必要はない。この醜い現実をよく道義的に生きる国家理性たらしめる道がある。それが歴史展開の理法である。ツキジデスは道義的な国家理性の問題を提起して、その大成を新らしい時代の哲学者に負託したものの如くである。

ともあれ、人間のつくるものとして歴史を考え、その歴史をつくる人間とは、個体としての人間ばかりでなくポリスもまた歴史をつくる個体であることをとき、その行動がいかに非合理にうごくかを如実に記述しながら、それが合理的になることにおいて、真のよき国家があらわれるものと示唆した。この点においてツキジデスは、新らしい歴史学の開眼をしたものといつてよい。

Historical Ideas of Thucycides

by

Zuien Hara

According to Thucydides, man makes history, a state is a historical individual, and the *Staatsräson* works irrationally. Concerning these themes, he as a historian always bore in mind to describe states as they actually were. However, it is also true that he did not fail at any moment to suggest what the state should be. Therewith he anteceded the philosophical researches in the fourth century B. C. in Athens.

Hermit Life (*In-itsu* 隱逸) of Tung Chin (東晋) Period

by

Yoshizane Murakami

In-itsu (隱逸) is a kind of seclusion, whose characteristics vary according to the ages. At the earliest times in China, *in-itsu* meant to retire to a remote place away from the governmental authority and to lead a hard life in producing foods and housing by oneself. This traditional *in-itsu* was prevalent as late as the Hsi Chin (西晋) period. At the Tung Chin (東晋) period, however, it came to be a solitary life in one's own land, provided with enjoyable facilities. This happened because of the consolidation of the aristocratic society, and did not always mean being less seclusive. Then, learning Taoism deeply, hermits of this age were respected among the nobles. Nevertheless they had much of the commoner as well as the aristocrat in the way of living.

A Study on Bandobon (坂東本) of Kyogyoshinsho (教行信證)

by

Toshihide Akamatsu

Resent studies of Kyogyoshinsho by Shinran (親鸞) have been